



(近江八幡)

## 滋賀・加茂遺跡

- 1 所在地 滋賀県近江八幡市加茂町
- 2 調査期間 一九九〇年(平二)六月～一九九二年一月
- 3 発掘機関 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 大沼芳幸
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

加茂遺跡は、元の水葦内湖の縁辺部の微高地上に立地する遺跡の一つである。微高地の最も高い場所には賀茂神社が鎮座し、その南を中世以来の主要街道である朝鮮人街道(県道大津・能登川・長浜線)が通っている。加茂遺跡は、この微高地から舌状に南に延びる部分を中心に広がるが、調査以前の考古学的知見は少なく、わずかに弥生時代、古墳時代の遺物散布が知ら

れているのみであった。また、周辺からは古瓦が採集されており、奈良時代もしくは白鳳期の古代寺院(加茂廃寺)の存在が予測されていた。

今回、加茂の集落の南を通るバイパス工事が計画され、試掘調査を行なった結果、広い範囲で古墳時代から近世に至る遺構、遺物が検出された。そこで、遺構の存在の予想される部分約二万㎡について発掘調査を実施することとなった。

調査の結果、自然流路から縄文時代後期の土器、古墳時代前期の土器が出土したが、中心となる遺構として奈良時代の竪穴式住居群と掘立柱建物群、加茂廃寺に供給された瓦の原料の粘土を採取したと考えられる土坑群、一二世紀から一三世紀にかけての掘立柱建物を中心とする遺構群などを検出した。一五世紀から一六世紀にかけてのものと考えられる洗い場状の遺構・エリ状の遺構も検出されている。

木簡が出土したのは自然流路SD一四からである。SD一四は、近世初頭まで少しずつ位置を変えながら流れた自然流路である。埋土は粘質土と砂層の互層で、流れの早い時期と淀んだ時期とが繰り返されることが窺える。ここから出土した大量の遺物は、全て溝の南西斜面の中・下層からのものであるが、層位による時期差は認められない。八世紀をおよその上限とし、九世紀から一〇世紀まで、一一世紀から一二世紀までの二時期にピークが認められる。こ

これらの遺物は、いずれも上流から流下してきたものであるが、摩滅をほとんど受けていないことから、上流部の遠からぬ所に先の二時期の大集落が存在すると考えられる。

八世紀から一〇世紀にかけての遺物には、須恵器杯・蓋・甕・壺・鉢、灰釉碗・皿・壺、緑釉皿、緑釉素地碗などがあり、一一世紀から一二世紀にかけての遺物としては、回転台成形土師器杯・皿・高台付き杯・高台付き小皿、土師器碗・小皿、黒色土器碗・鉢・甕、土師質羽釜・埴、信楽甕、須恵質曳網系土錐、土師質曳網系土錐などがある。回転台成形土師器杯や黒色土器碗の中には、底部外面や内面に「井」の線刻や墨書の施されたものがある。また、金属製品には、隆平永宝（延暦一五年（七九六）初鑄）・富寿神宝（弘仁九年（八一八））・延喜通宝（延喜七年（九〇七））などの銅銭、鉄鏃、刀子などがある。なお、木簡がいずれの時期に属するかは不明である。

このように、今回の調査においては、寺院自体の遺構は検出されなかったが、寺院の存在を窺わせる遺構、遺物が検出されており、この地域における古代から中世にかけての中核的集落の一部であることが明らかになった。

## 8 木簡の積文・内容

(1)



388×54×2 065

両端部を削り、丸く仕上げる。二次的加工の可能性が考えられる。左辺の一部は欠損している。表裏に多数の文字らしきものがあるが、赤外線テレビカメラ装置を用いても解読できなかった。

## 9 関係文献

滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『主要地方道大津・能登川・長浜線改良工事に伴う加茂遺跡・一ノ坪遺跡発掘調査報告書』（一九九四年）

（大橋信弥（安土城考古博物館））

